

「ファンド」に受け継がれる 巨星・渋澤栄一の「遺伝子」

大手機関投資家とヘッジファンドのあいだを橋渡しし、個人金融資産の中身を大きく変えようとしている男がいる。渋澤健。明治日本の礎を築いた渋澤栄一の孫の孫だ。彼の試みを通して、ファンドマネーの新たな動きを紹介する。

「おカネは水たまりに散らばって
いる。それが銀行を通して大きく
なって川になり流れれば（経済の）
原動力になる」

明治時代、国内初の銀行である
第一国立銀行を創業した渋澤栄一
は、こんな言葉を遺した。

その渋澤の孫の孫に当たる渋澤
健は、「現代の銀行は大きな川とい
うより淀んだ大きな湖になってい
て、なかなか動かない。だからこ
そ、二〇〇〇年代に入ってファン
ドが市民権を得たのではないか」
と指摘する。

一九六一年生まれの四四歳。米
国有名大学のビジネススクールに
学び、J.P.モルガン、ゴール
ドマン・サククスといった有力投
資銀行を渡り歩いた渋澤は、九六
年からの五年間、ヘッジファンド
大手のムーア・キャピタル・マネ
ジメントに籍を置く。「ヘッジファ
ンドとの付き合いはかれこれ一五

年」で、このビジネスの裏も表も
知り尽くしている。

そんな彼が次に選んだのは、日
本の機関投資家とヘッジファンド
のあいだを橋渡しする仕事だった。
生損保、年金といった機関投資
家は、折からの超低金利で資産運
用に困っている。安定的な利回り
を確保するためには、ヘッジファ
ンドをはじめとするオルタナティ
ブ投資（伝統的な株式・債券以
外の投資）の比率を上げていくし
かない。

ところが、生損保、年金には、
無数に存在するヘッジファ
ンドから投資すべきものを厳選す
るノウハウがない。そこで、渋澤
のような「仲人」の出番となる。

二〇〇一年にシブサワ・アンド・
カンパニーを単身で設立した彼は、
優良なヘッジファンド（いくつか
のヘッジファンドに分散投資する
「ファンド・オブ・ファンズ」が多

い）を大手機関投資家に紹介し、
その「指南役」として資産運用の
手助けをしている。

「私がムーアで働いていた頃のヘ
ッジファンドは、はつきりいえば
「ならず者」のイメージだったと
思うんです。ところが、今では様
変わり。オルタナティブ投資の
すそ野が年金、地方銀行にまで広
がってきた」

オルタナティブ投資のうねり
は、さらに大きくなりつつある。
たとえば、渋澤が投資委員会のメ
ンバーを務めるマネックス証券で
は、近く「ヘッジファンド」に投
資対象を限定した投資信託を販売
するという。

「セミナーの応募者数が、なんと
三〇〇〇人ですよ。予定していた
会場では収容し切れないので、急
ぎよホテルを変更したのだけれど、



K. Sumitomo

渋澤 健

シブサワ・アンド・カンパニー
代表取締役

それでも二〇〇〇
人しか入り切らな
かった。この時代、
個人だつてオルタ
ーナティブ投資を
求めている証左で
すよ」

最初は「超が付くカネ持ち」が
中心だったオルタナティブ投資
も、現在では機関投資家が主流と
なり、さらには個人にまで広がる
うとしている。預貯金が六割を占
める個人金融資産の中身が動きつ
つあるのだ。

「年金なんかは長期投資といいな
がら、結局は単年度のトラックレ
コード（運用実績）に左右される
ことが多い。その点、個人は真の
意味での長期投資ができる。個人
マネーのベースができれば、おカ
ネの流れも変わる」

「ファンド」を仲介役として、個
人のおカネを日本経済活性化の新
しい流れに結び付けようとしてい
る渋澤。その試みは、遠い明治の
昔に、「銀行」を通じて同じ理想を
実現しようとした渋澤栄一の姿に
重なる。（敬称略）